2018年11月30日（金曜日）の読売新聞に
アフリカの子供たちに靴を届けるプロジェクト
「くつ贈り隊」について掲載されました！

2018年(平成30年)11月30日（金曜日）　讀賣新聞

アフリカの子に靴を

那須塩原の「パン・アキモト」

不用品集め船便で400足

集まった靴を箱詰めする秋元さん（右）と藤田さん（那須塩原市のパン・アキモトで）

那須塩原市のパン製造販売会社「パン・アキモト」が、全国の人や学校などから履かなくなった運動靴を集め、アフリカの子供たちに届けるプロジェクト「くつ贈り隊」を始めた。24日には、アフリカ南部のエスワティニ（旧スワジランド）に向けて、第1弾の発送が始まった。同社はこれまでも、食糧難に悩む世界の国・地域などに、自社製品の缶詰パンを届ける活動に取り組んできた。担当者は「古くなってもまだまだ履ける靴をアフリカで生かし、子供たちに笑顔になってもらいたい」と話している。

同社は1995年の阪神・淡路大震災を機に、長期保存できる「パンの缶詰」を開発し、販売している。2009年からは、賞味期限まで残り1年となって自治体や企業などから回収した備蓄用の缶詰パンを、食糧難の国や国内外の被災地に無償提供する「救缶鳥（きゅうかんちょう）プロジェクト」を展開。これまでに延べ16の国・地域のほか、今年7月の西日本豪雨、9月の北海道地震などの被災地に届けた。

くつ贈り隊の活動は、営業本部部長の秋元信彦さん(39)が今春、缶詰パンを届けるためにエスワティニを訪れたことがきっかけ。秋元さんは現地の学校で、多くの子供たちがはだしのまま遊ぶ様子を目の当たりにした。「足の傷が原因で死んでしまう子もいる」と聞かされ、「自分も小学生の子供がいる親として、つらい気持ちになった」と振り返る。

「子供の成長は速く、新しい靴を買ってもすぐに履けなくなってしまう。不用になった靴を持っている人は多いはず」。秋元さんは帰国すると早速、履かれなくなった靴を国内で集め、エスワティニの子供たちに送るために動き始めた。

プロジェクト担当になった同社救缶鳥課の藤田和恵さん(42)が夏頃から、那須塩原市内の学校訪問や、缶詰を購入した顧客へのメールマガジンを通じて、靴の提供を呼びかけ始めた。「救缶鳥の日」として9月9日に那須塩原市内で開いたイベントでも呼びかけるなどして、集まった靴は約500足にも上った。いずれも子供が履ける16～24センチの運動靴で、傷みも少ないという。藤田さんは「想像を超える数の靴が集まり、胸が熱くなった」と話す。

靴はまず400足を船便で送る予定で、今月24日には県内の倉庫から新潟県の港に向けて発送された。エスワティニには早ければ、年末か年明けにも到着する予定だ。税関手続きなどを含め、スムーズに運ぶことが可能だと確認できれば、今後も定期的に届けることも考えるという。

秋元さんは「靴のプレゼントをきっかけに、現地の子供たちが日本のことを知り、訪れることにつながればうれしい」と話している。

靴の提供などの問い合わせは、同社（0287・65・3351）。

那須 鹿の湯 栃木県最古の湯